

一般病院におけるターミナルケア

田中克子 小野幸子 奥村美奈子 小田和美 梅津美香 北村直子 グレッジ美鈴 (大学) 中川千草 佐藤良子 武藤純子 (羽島市民病院・1病棟3階 2病棟)、小松博子 杉本八重子 (岐阜市民病院・看護部 西5階)

はじめに

岐阜県下にはホスピス・緩和ケア病棟として承認されている施設は1ヵ所しかなく、日本では約8割の人が病院で死を迎える現状¹⁾から、岐阜県下の多くの人はいわゆる一般病院で死を迎えているといえよう。したがって、岐阜県下の一般病院におけるターミナルケアは看護実践現場においても重要な課題である。このことから一般病院におけるターミナルケアの質の向上を目指して平成12年度から発展的に共同研究を行ってきた(図1)。平成16年度は事例検討会を重ね、他職種・他施設と情報交換を行いターミナルケアの取り組みに向けて具体的方策を模索した。さらに、ニューズレターや講演会の企画を通してネットワークの基盤作り、看護者の動機付けを強化する活動を行った。以下その活動の概要について記す。

用語の定義

ターミナルケア：①疾病・障害によって引き起こされる生命の終末に臨む人々へのケア②加齢に伴って訪れる人生の終末に臨む人々へのケア、の2点とした。

Ⅰ. 事例検討会

羽島市民病院、岐阜市民病院、大学の主催で月に1度の割合で一般病院におけるターミナルケアについての事例を各々が持ち回りで出し合い、約1時間30分～2時間行った。毎回の参加者は看護職者、薬剤師、医師等約20人であった。事例検討会での検討内容は参加者の承諾を得て毎回録音し、後日逐語録にしたものを資料として共同研究者がプライバシー・匿名性の確保に十分配慮し関係者に配布し、保存した。なお、倫理的配慮として検討会に出された事例に関しては対象者または家族の承諾を事例提供者が事前に得た。

検討会に出された事例を表1にまとめた。事例については、ターミナルケアに関わる事例の検討を行うことを共同研究者間で決めており、それ以外の制約は行っていない。出された事例のテーマは「生きがい」、「不安」、「告知」、「痛み」、「患者との関わり方」、「予後の過ごし方」というターミナルケアにおいては重要なテーマであった。

一般病棟のターミナルケアの課題²⁾には、症状コントロール、チームアプローチやコミュニケ

ーションスキルの重要性が述べられている。その3つの課題と今回出された事例のテーマに共通項がみられることから、事例提供者の看護者の考え・思い・悩むことは、いわゆる一般病院のターミナルケアの課題としては全国共通なものであるといえよう。一般病棟においては、病期の異なる患者と同じ病棟にいること、環境設備面に制限があることから生活の視点が欠落することや、同時に在院日数の短縮化に伴い十分なターミナルケアを提供することが現実的には厳しい現状がある。しかし、一方、一般病院だからできるターミナルケアを考え、その人らしく最後を迎えることができるために、共同研究者の所属する病院では、緩和ケア部会・チームを発足させている。今後は、一般病院におけるターミナルケアの目指すあり方を示すためにも、このような事例検討会を重ね、実際の看護実践に生かせるケアの指針を示していくことがわれわれの課題と思われる。そのため、合同事例検討会での検討内容の資料を一般病院でのターミナルケアの向上のためにどのように役立てていくかについてさらに、考えていく必要がある。

また、検討会参加者の意見(表2)から、他施設との情報交換・意見交換を通じてターミナルケアに向けて看護者自身の意欲の動機付け、取り組みへの具体的方策についてアイデアを得るきっかけとなる等が述べられ、このような合同の事例検討会は意義があると思われた。

Ⅱ. 講演会・ニューズレターの企画

今年度は、昨年の調査で最も希望が多かった代替医療についての講演会「一般病院における代替医療の可能性」(12月12日講演者：帯津良一)を企画した。

代替医療は、西洋医学以外の療法、つまり、東洋医学と言われる、鍼や灸をはじめ指圧・マッサージと言った手技療法、各種民間療法、ホメオパシーやそれぞれの国の伝統療法、カイロプラクティックやオステオパシー、精神性を求める瞑想や催眠療法、ヨーガやアロマセラピーなど、色々と多岐にわたっている³⁾。そして、その評価については不明な点もあるといわれているが、ほとんどの患者が使用しているのではないかといわれ

ている⁴⁾。このことから、看護職者が代替医療について関心が高いのはうなずける。

講演会后、参加者を対象に行った質問紙調査の協力者(42名)の結果について以下に述べる。

職種は「看護職者」が最も多く24名、順に「助産師」が13名、「その他」が2名であった。「講演会参加の理由」は、テーマに関心が合ったが最も多く36名、順に「職場から薦められた」6名、「代替医療で困っていることがある」1名、「その他」が7名であった。「講演会の感想について」は(表3)、「代替医療について知識が得られ今後も深めたいと思った」、「興味深く親しみやすい講演であった」、「患者との関わり方の見直しの大切さについて見直すきっかけとなった」、「新しい見方・価値観を得た」、「代替医療は病院でも活用できる可能性はあると思った」等があげられた。

講演会の講師は代替医療の第一人者であったこと、講演には多くのスライドが用いられたため非常に質の高い、わかりやすい内容であったのではないかと思われた。しかし、講演会の内容はどちらかというと「代替医療の概要」のレベルで終わってしまった印象がある。参加者から代替医療に興味関心があり、より具体的な実践方法についても知りたいという意見もあったので、もし可能であるならば、次回は代替医療の具体的な実践についての講演会を企画することを検討したい。

参加者の全体の感想から、今回行った代替医療の講演会は、非常に意義があったと思われる。また、大学に対しては講演会の企画など情報発信の役割も期待されていることから、今後も看護職者の希望に沿った講演会の企画を薦めていきたいと思う。

ニューズレターには、講演会の企画も含め、われわれの活動報告として岐阜県下の20床以上の病院約120施設に送付した。この活動については、われわれの活動を県下の看護職に知ってもらうという目的があるため、今後とも継続していきたいと思っている。

Ⅲ. 平成16年度の共同研究の成果

1. 合同事例検討会は、他施設や他職種との意見交換・情報交換の場となった。さらに、検討内容を資料として関係者に配布したことは、他職種の意見を冷静に分析するきっかけになりチーム医療への理解を深め、事例のフィードバックにつながり具体的な看護方法を模索する手がかりになった。また、事例提供者にとっては、自身の看護ケアを分析する上で非常に役に立ったと思われた。

2. 大学教員にとっては、現場の現実的な問題・課題を知ることができると思われた。

3. 講演会の企画やニューズレターの配布は、ネットワークの基盤整備に貢献し、県下の看護職者のターミナルケアに対する意欲を向上させると思われた。

Ⅳ. 今後に向けて

1. 合同事例検討会について継続的な評価が必要である。例えば、現場の看護実践にどのように役立つのか。
2. 合同事例検討会に関わる上での個人情報の取り扱いについて検討する。
3. 研究者間の連携について、なお一層お互いが機能できるように努力する。
4. 県下の看護職者にとって興味深い講演会の企画を行う。

Ⅴ. 討論したこと

参加者から以下の意見をいただいた。

・検討会を通じて、多職者の意見を聞き視野を広げることができた。

・ターミナルケアに関してあらためて考えることができた。

・ターミナルケアに対する意欲が増した。

・本院でも有志で緩和ケアの勉強会を看護職者を中心に行っていて頑張っているが、継続するにはどのようにしたらよいか。

→共同研究を行っていてわかったが、事例検討会を行うことは、事例提供をすること自体がなかなか大変なことである。共同で行うことで事例提供等の看護職者の負担が減る、共同で行っている以上は、大変だからといって簡単に脱落できない、大学が参画することによって、事例をまとめることへの支援や現場の看護職者とは違った視点での意見が述べられるので、こういうことが継続につながるのではないかと思われる。

・ターミナルケアは一般病院においても重要であると思われるが、勉強会はまだ発足していない。

引用文献

- 1) 厚生労働大臣官房統計情報部編：厚生統計要覧，40，厚生統計協会，2004.
- 2) 西山玲子：一般病棟の課題と展望，27(1)；20-21，2004.
- 3) 獨協医科大学越谷病院臨床検査部教授 森三樹雄：びょうきのはなし・病気事典，2005-03-11，<http://homepage3.nifty.com/mickeym/simin/66daigae.html>
- 4) 田村康二：代替療法の評価，死の臨床，25(1)；12，2002.

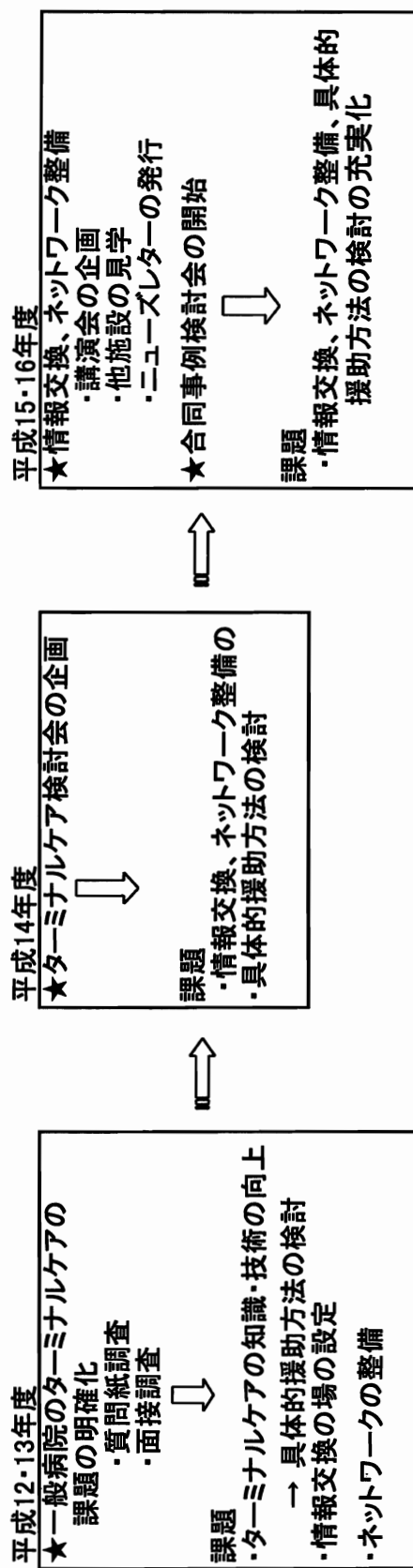


図1 平成12～16年度までの共同研究の発展のプロセス

表1 事例の概要

事例1	テーマ	終末期にある患者さんの生きがい
2004.6	患者	50歳代 男性 公務員
	家族	妻、子ども(長男、長女、次男)、養母 6人家族
	診断名	膵臓がん(再発)、肝臓がん、がん頸椎転移(右上腕不全麻痺)、がん性腹膜炎
	告知	病気については本人にすべて告知されていた。
	経過	がん性疼痛コントロール目的で入院する。 疼痛コントロールを行うが、右手に麻痺がみられるようになった頃から死に対する言葉が見られるようにな 緩和ケア病棟への転院については、本人から最期までこの病院にいたいと言われた。 状態が安定した段階での退院は、本人家族も不安があるため週末外泊を数回おこなった。 がん性腹膜炎悪化に伴うイレウス症状の悪化、がんの腸管浸潤による腸管穿孔から糞便性腹膜炎、 敗血症併発し永眠された。
	入院期間	入院期間: 約5ヶ月
	事例検討会 参加者	22名(看護師15、医師2、薬剤師2、教員3)
事例2	テーマ	不安が強い患者とのかかわりの中で悩んだこと 一抑うつ状態に陥ったときにどう関わったらよいか
2004.7	患者	50歳代 男性 工場勤務
	家族	妻、長男夫婦と孫、長女の6人家族
	診断名	肺がん(小細胞がん、線がん)、肺門・縦隔リンパ節腫脹
	告知	線がんとして説明している。家族の意向で「肺がん」といわなかった。
	経過	化学療法目的で入院する。1クール3回の化学療法を受けるが、3回目の化学療法時より抑うつ状態見られ 心療内科を受診する。化学療法の効果が見られないため、薬剤変更し2クール目の化学療法を開始する 2回目の化学療法開始後、抗うつ薬処方される。状況に応じて外出泊を行ってきたが、外来で化学療法を 受けるため退院した。
	入院期間	約4ヶ月
	事例検討会 参加者	参加者: 22名(看護師12、医師3、心理師1、薬剤師2、教員4)
事例3	テーマ	わが心に残ったターミナル期の患者とのかかわりで学んだこと
2004.9	患者	50歳代 女性
	家族	夫と長男夫婦(孫2人)6人家族、次男家族と長女家族とは別居
	診断名	盲腸がん、腹膜播種による腸閉塞
	告知	病名は告知されていた。余命や入院中の病気に対する説明はされていない。
	経過	外来で化学療法を行うが、腫瘍マーカー上昇したこと、腹満感、食欲不振のため入院となった。 小腸穿孔のため、腹膜炎ショックから空腸・回腸バイパス術、回腸瘻・胃瘻造設する。 再度腹膜炎が悪化し、人工肛門造設術を行う。 5分粥程度の摂取は可能になったが、胃瘻から排泄される状態であった。 がんの進行とともに、疼痛コントロールを行った。胃瘻管理が困難なことから、退院はできなかったが、 外出を繰り返し、永眠された。
	入院期間	約6ヶ月
	事例検討会 参加者	23名(看護師12、医師5、心理師1、理学療法士1、薬剤師3、教員1)
事例4	テーマ	末期患者への看護を通して考えさせられたこと
2004.10	患者	50歳代 女性
	家族	夫と2人暮らし
	診断名	胆管がん、胸部がん性リンパ管腫、閉塞性黄疸
	告知	胆管がん、閉塞性黄疸はこくちされていた。胸部がん性リンパ管腫は家族の意向で告知されなかった
	経過	胆管がん、胸部がん性リンパ管腫でERBD挿入し、CVリザーバー増設のため入院となった。 一時退院するが、閉塞性黄疸にて再入院となった。ERCPIにより、通過不良を起こし、ERBD 入れ替え、右側にPTCD挿入した。入院時より絶飲食であった。 胸水、腹水貯留により全身状態悪くCVリザーバーから高カロリー輸液開始となった。 左肝PTCD挿入し、計4回の化学療法を行ったが、永眠された。
	入院期間	約1ヶ月
	事例検討会 参加者	
事例5	テーマ	告知を受けた患者の予後の過ごし方
2004.11	患者	70歳代 男性
	家族	妻と2人暮らし、長男夫婦(孫2人)と次男は別居
	診断名	膵臓がん、胃十二指腸への転移
	告知	家族の意向で「巨大胃潰瘍」と説明された
	経過	腹痛が軽減せず睡眠、食事が十分取れないため入院となった。 手術が不可能であることから、化学療法と疼痛コントロールをおこなった。 高カロリー輸液を開始し、病状が安定し、食事も取れるようになった。 週末外泊できるようになったが、突然意識レベルがおち、永眠された。
	入院期間	約3ヶ月
	事例検討会 参加者	
事例6	テーマ	痛みの評価に困難をきたした1事例
2004.12	患者	60歳代 男性
	家族	内縁の妻 子ども2人、妻とは別居
	診断名	肺がん、脳転移、C型肝炎
	告知	病状説明はされている
	経過	肺がんと診断され、化学療法を行った。退院後両上肢のしびれが強く、全身の痙攣が 出現して、入院となった。入院時よりグリセオール点滴、頭部にRT照射をおこなった。 化学療法を行ったが本人の希望で1クールを終了し、一時退院した。現在外来退院中である。 疼痛については内服薬でコントロールしていたが、痛みに対する評価は 家族に対する表現と看護師に対する表現が異なるため痛みの評価には困難であった。
	入院期間	約1ヶ月
	事例検討会 参加者	15名(看護師12、薬剤師1名、医師1名、教員2名)

表2 合同事例検討会の評価できる点

ターミナルケアに関する他の施設の看護・医療の情報が得られる
学生の参加によって、看護の原点を振り返ることができる
自己の看護観を深められる
看護実践への良い刺激になる
ターミナルケアに関して改めて考えることができた
他部門、他職種との情報・意見の交換ができた
ターミナルケア以外の看護に関する意見が聞けた
施設環境の異なりが看護援助に影響することが理解できた
ターミナルケアに対する意欲が増した
施設は違うが良い看護をしたいという仲間が増えた
事例提示の負担が軽減した
看護教育の立場からの意見を聞けることは臨床の実践者として自信につながった
参加者のいろいろな経験や意見を聞くことができ参考になった
検討会後に所属部署の取り組みを振り返ったり相談し話し合う機会が増えた

表3 講演会参加者の感想

代替医療について知識が得られ、今後も深めたいと思った
講師の取り組む姿勢がよく理解できた
全人的に捉えケアできることを理解した
興味深く親しみやすい講演であった
患者との関わり方の見直しの大切さについて見直す機会となった
新しい見方・価値観を得た
死について考えることが必要であると思った
病院での代替医療の取り入れ方が課題である
代替医療は病院でも活用できる可能性はあると持った
より具体的な実践方法について聞きたい
講演内容は難しかった
その他

(参加者からの感想1意味内容を1記述とした62記述を意味の類似性ごとにまとめた)